

第50回民放労連全国女性のつどいin宮城 未来へツナグ経験、そして生きるチカラ

「第五〇回全国女性のつどい in 宮城」で行われた記念講演、幅広い内容で行われた分科会の様子を紹介します。

女性のつどい全体会

女性のつどいの全体会は、大久保実行委員長の「被災地と言われているが、地元では今も復興の道筋を伝えつづけている。現状を知りつつ仙台の空気がましんでください」という挨拶で始まり、続いて、労連本部の赤塚委員長、白石女性協議長の挨拶がありました。「女性のフットワークのよいお節介りにより、仕事の連携もうまくいき、職場が明るくな

る。女性のお節介りパワーを生かして、日本を明るくしよう」という白石議長の主張に多くの参加者が共感しました。さらに、岸田女性協書記長がメディアで働く女性の現状について発言し、「つながりを活かしていこう。おかしいと思うことに声をあげて変えていこう。優秀でいよう」と提言しました。また、女性のつどい五〇回を振り返り、女性のつどい

震災を忘れずに…

お笑いコンビ サンドウィッチマン



笑いあり涙ありの講演でした

記念講演には、仙台市出身の人気お笑いコンビ・サンドウィッチマンが登場。あの3月11日、サンドウィッチマンはバラエティ番組のロケで訪れていた宮城県仙台市で被災しました。講演では地震発生当時の状況、彼らが見た被災地の現状、そして復興への想いなどを語ってくださいました。気仙沼港で強い揺れを感じた直後、番組スタッフの叫びの判断で、近くの安波山（あなばさん）へ避難したという二人。彼らはそこで気仙沼の街が波にのまれていくのを見ました。

あの時すぐに避難したから今生きていられる…。私たちに津波の恐ろしさ、そして避難することの重要性を説いてくださいました。今でも頻りに訪れている被災地で、彼らは被災された現地の方との会話を大切に

に關わってきた方の発言がありました。「開催地の苦労は大変だが、その過程で学ぶことも多い。組合は、働く者の学校である」「過去に開催する側として苦労もあったが、つどいは会社の垣根を越えて、いろいろな話ができ、元気をもらえる機会である」「今まで、数々のつどいに参加して、同業の女性のみならずから力をもらって充電してきた。全体会を終えました。

分科会①

ドキュメンタリー映画『3・11ここに生きる』上映と講演

ロイター通信社で報道記者として働きながら、週末にドキュメンタリー映画のロケをしている我謝京子さん（テレビユー福島労組・小針朋子）



分科会①の講師・我謝京子さん



分科会②の講師・蜂須賀禮子さん



分科会③の講師・山崎 毅さん



分科会④の講師・杉浦元亮さん

分科会②

原発事故と福島県の現状

東京電力福島第一原子力発電所が立地する大熊町の商工会会長蜂須賀禮子さんを講師に迎え、原発事故による避難生活についてお話

以前、国会事故調査委員を務めた蜂須賀さんは、大熊町の花屋のかあちゃんでした。原発は安心・安全と教えられた身近な存在。震災後その安全神話が崩壊し、二三日で戻ってこれると思われていた避難先が、先の見えない仮設住宅での生活に変わってしまいました。

鶏の刺身は、新鮮なほどカンピロバクター菌が多く食中毒になりやすいという話には驚きの声が上がりました。思い込みを捨てて正しい情報を元に判断する大切さを

分科会③

食の安心…大切なのは食の安全を理解すること

（福島テレビ労組・空戸久美子）

以前、国会事故調査委員を務めた蜂須賀さんは、大熊町の花屋のかあちゃんでした。原発は安心・安全と教えられた身近な存在。震災後その安全神話が崩壊し、二三日で戻ってこれると思われていた避難先が、先の見えない仮設住宅での生活に変わってしまいました。

「評価」「新奇性」「自己開示」でやる気のツボを刺激することだそう。興味深いお話を様々な事例を用いてご説明いただきました。参加者からは多くの質問が飛び出し、とても活発な分科会となりました。（福島放送労組・高野可南子）

分科会⑥

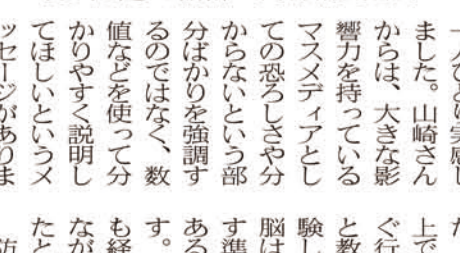
地震のメカニズムと防災

（東北放送労組・小林なつ子）

分科会⑤の講師・清治邦章さん



分科会⑥の講師・阿部清人さん



一人ひとりと実感しました。山崎さんからは、大きな影響力を持っているマスメディアとしての恐ろしさや部分ばかりを強調するのではなく、数値などを使って分かりやすく説明してほしいというメッセージがありました。防災啓発の観点から人に行動させるためのヒントも学びました。キーワードは「評価」「新奇性」「自己開示」でやる気のツボを刺激することだそう。興味深いお話を様々な事例を用いてご説明いただきました。参加者からは多くの質問が飛び出し、とても活発な分科会となりました。（福島放送労組・高野可南子）

分科会④

危険を察知する「生きる力」脳科学から防災を考える

（東北大学准教授の杉浦元亮先生をお招きし、脳科学を防災に活かすポイントを学びました。まず自分の脳が危険に対して敏感か鈍感かを知るテストを行い、自分の脳の傾向を知りました。）

分科会⑤

震災の経験から学ぶ「ココロのお話」

花京院健康センター所長の清治邦章さんを招き、自分の「心の健康」をチェックしつつ、ストレスの対処法を学びました。まず、個人で対処できるストレス対処法は五つ。バランスの良い食事、十分な睡眠、生きがいや目標を持つこと。そして、自分に合った趣味に打ち込み、信頼できる人に悩みを相談することです。ほどよいストレスは、能率向上につながります。ある程度のストレ

スを持ち、仕事と上手に付き合うことが良いのです。また、震災の経験から心に傷を負ったPTSDの人との接し方も学びました。注意すべき点は、「すみません」と自分が悪くなくても謝り、「共感するけど共感しすぎない」心がけです。被災地での取材時など、自分の心はどう向き合うべきか学びの多い時間でした。（東北放送労組・小林なつ子）

せんたい泉エフエムの取締役で防災士の阿部清人さんを講師に迎え、東日本大震災で被災した経験を踏まえた「防災の心得」をお話いただきました。サイエンスインストラクターとしても活躍中の阿部さんは、震災後、全国各地で防災実験ショーの依頼が増えたということです。今回の講演でも、「地震のメカニズム」や災害に必要な「防災グッズ」を実験しながら学びました。振り子実験では、同じ震度でも揺れ方によって何故被害に違いが出るのかを、参加者が実際に振り子を作って検証し、揺れの違いによって被害に差が出ることが分かりました。参加者はあつと驚く実験の数々を、携帯で撮影するなどして、防災への意識を高めていました。（青森テレビ労組・伊織光



全員参加で迫力の記念撮影

東北放送の林アナウンサーと宮城テレビの鈴木アナウンサーの進行で行われた交流会は、各分科会を終え、参加者の緊張も和らいだ中でスタートしました。

フカヒレなど、仙台国際ホテル自慢の地元食材を使った料理とお酒を味わいました。各分科会の発表も行われ、自ら学んだことを整理し、他のグループの知識を共有することのできる、貴重な場となりました。分科会講

師を代表して、女性協OGでもある我謝京子さんから「女性のつどいで映画を上映するという夢が叶ってうれい！」とご挨拶をいただきました。そしてお楽しみイベントとして、実行委員が持ち寄った福島・宮城・岩手・青森四県の豪華で当地グルメの抽選会を行いました。

最後は実行委員会から参加者の皆様に御礼のご挨拶。会場は常に大盛り上がりで、笑顔が絶えない交流会となりました。

(宮城テレビ放送労組・松本智恵)

感しました。過密日程にも関わらず、笑顔でそして真剣に参加してくださった皆さん、本当にありがとうございました。

(東北放送労組・大久保悠)

ばかりの堀潤氏をお迎えし、震災直後の原発事故についてお話を聞きました。

「マスメディアが福島原発事故の情報を当初すぐに報道しなかったのは悪意ではなく、世に出した後起こるであろうパニックを恐れたからだ」「局内でニュースを取捨選択する過程も本来は公開すべき」「NHKを飛び出したのは『一時情報を持った市民が発信できるプラットフォーム作り』を加速して行いたかったから」。

NHK時代からアナウンサーでありながらリポート力メラを回し編集もするフィールドプレイヤーだった堀氏の講演は、時間を感じさせずのめり込んで聞くことができました。国の原発を取材し、日本の原発事故の現実を丹念に描いた監督作品『変身』の一部も上映され、大量の放射性物質の放出とその時点での風向きがわかっていながら、情報公開を最後まで渋っていた政府と東電のやりとりの映像は衝撃的でした。民放はスポンサーや代理店との関係性で打ち破れない壁があります。ではどうすればいい？オープンジャーナリズムとは？本職である私たちも今一度原点に戻って真剣に考えなければと感じました。

(福島放送労組・宇野章子)

大盛り上がり「交流会」



関上中学校で…

参加した方々の様子を近くで見ている感じ。これは、「この震災を忘れるまい」という強い意志を皆さん一人ひとりが持っているということ。立ち寄った場所全てで「現地の人たちの今の気持ちや当時の思いを聞きた



講師の堀潤さん

被災地 バスツアー

2日目分科会
二日目に開かれた被災地バスツアー。全国各地の放送局から六〇人もの方に参加していただき、宮城県の沿岸部の中でも津波被害が大きかった場所の一つ、仙南の山元町、名取市関上を回りました。最初に立ち寄ったのは、津波被害を受け

た「夢いちごの郷」。再建されたハウスには、大きく赤く実った自慢のイチゴの姿が！皆さん夢中になって食べごろのイチゴをほおばっていました。その後、名取市の関上地区に店を構えていた商店主で立ち上げた復興商店街「関上さかい市場」で昼食タイム。そして最後には、九〇〇人以上の方が亡くなった関上地区へ。現地の語り部ガイドさんに案内してもらいながら、港の近くの様子や、亡くなった生徒のための慰霊碑が建てられた関上中学校などを訪ねました。

2日目分科会 震災報道を 語る

元NHKアナウンサーで時の人、ロスから帰国した

2011年3月、東日本大震災が起こったのは、全国女性のつどいの東北開催が決まった一週間後のことでした。二年後、どこまで復興は進んでいるだろうか？皆さんを笑顔でお迎えできるだろうか？でもきつと五〇回目の節目を東北で迎えることは、きつと何か意味があるはず…。

昨年の北海道大会終了後、本格的に準備がスタートしました。被災した私たちがだからこそ伝えたい思いを胸に、つどいの内容についてとことん話し合い、数

えきれないメールをやり取りし、時にはぶつかることもありました。当日、全国から集まった一九五名の笑顔を目の当たりにし、アンケートでも来てよかった」と多くの声。「やってよかった！」と実行委員一同、感無量でした。全国の皆さんにたくさん元気をもらいました。応援・ご支援本当にありがとうございます！

(青森ケーブルテレビ労組・対馬愛)

つどいに参加された皆様へ